51255
リ 4
5381

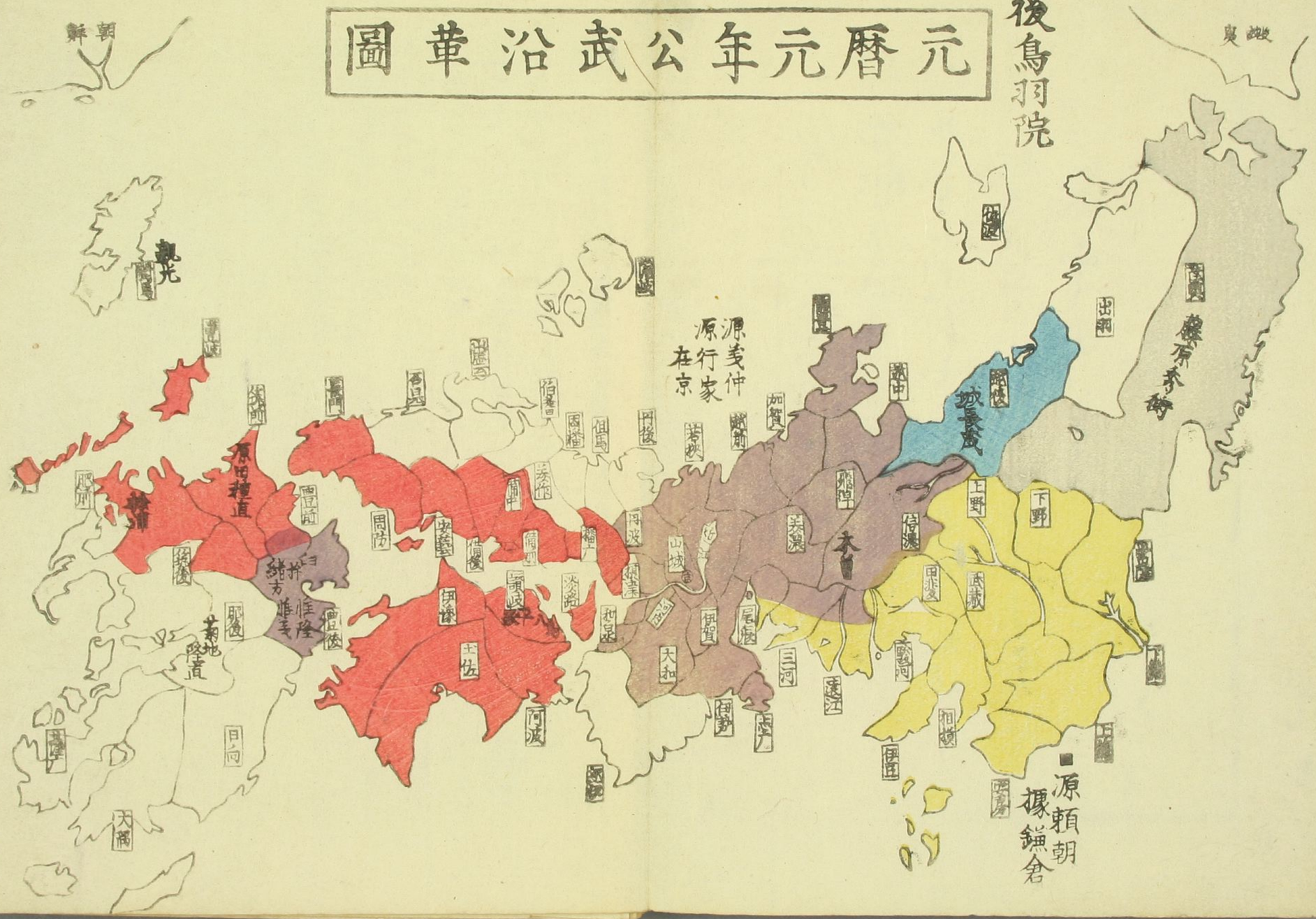
門リ4
流5381

ゆゑに其想像を不見冊子最さいまの
こと実に適其の様あるを出ともとなる
是彼の考へ免ぜん角のとなりしさを
をもの行事り祝たる人様に推ふる
さ無て面白き他免きまを記婦ちを
す稱茲に式事庫ち冊図に見出
事列に欲さら行まの代雄著しく
ちやちあるから稱さ字知図に保元
弘後の治革を使ふ記に記して寛
嘉りしに徳ふ門好の士に為
さらかめを事も紀図ちあるとを敬
梓に彫ふ冊弘寿図さふを
成み事り又さらかちに付し
著仕ふを事に東ふ事み推実
筆に成ふり

正 盈事さる

勝伏氏日蔵書
1 57255

元暦元年公武沿革圖


後鳥羽院
朝鮮
蝦夷
親光
源義仲
源行家
在京
藤原秀衡
城長茂
出羽
陸奥
越後
佐渡
加賀
能登
越中
飛騨
信濃
上野
下野
常陸
武蔵
甲斐
駿河
相模
伊豆
安房
上総
下総
三河
遠江
美濃
尾張
伊賀
大和
伊勢
紀伊
丹後
但馬
因幡
伯耆
石見
出雲
備後
備中
備前
播磨
摂津
丹波
山城
近江
和泉
河内
淡路
阿波
伊予
土佐
讃岐
安芸
周防
豊前
豊後
肥後
肥前
筑後
筑前
日向
大隅
薩摩
源頼朝
據鎌倉
源義経
源範頼
源田禅直
緒方惟義
平能隆
平能隆直

元暦元年公武浴革圖

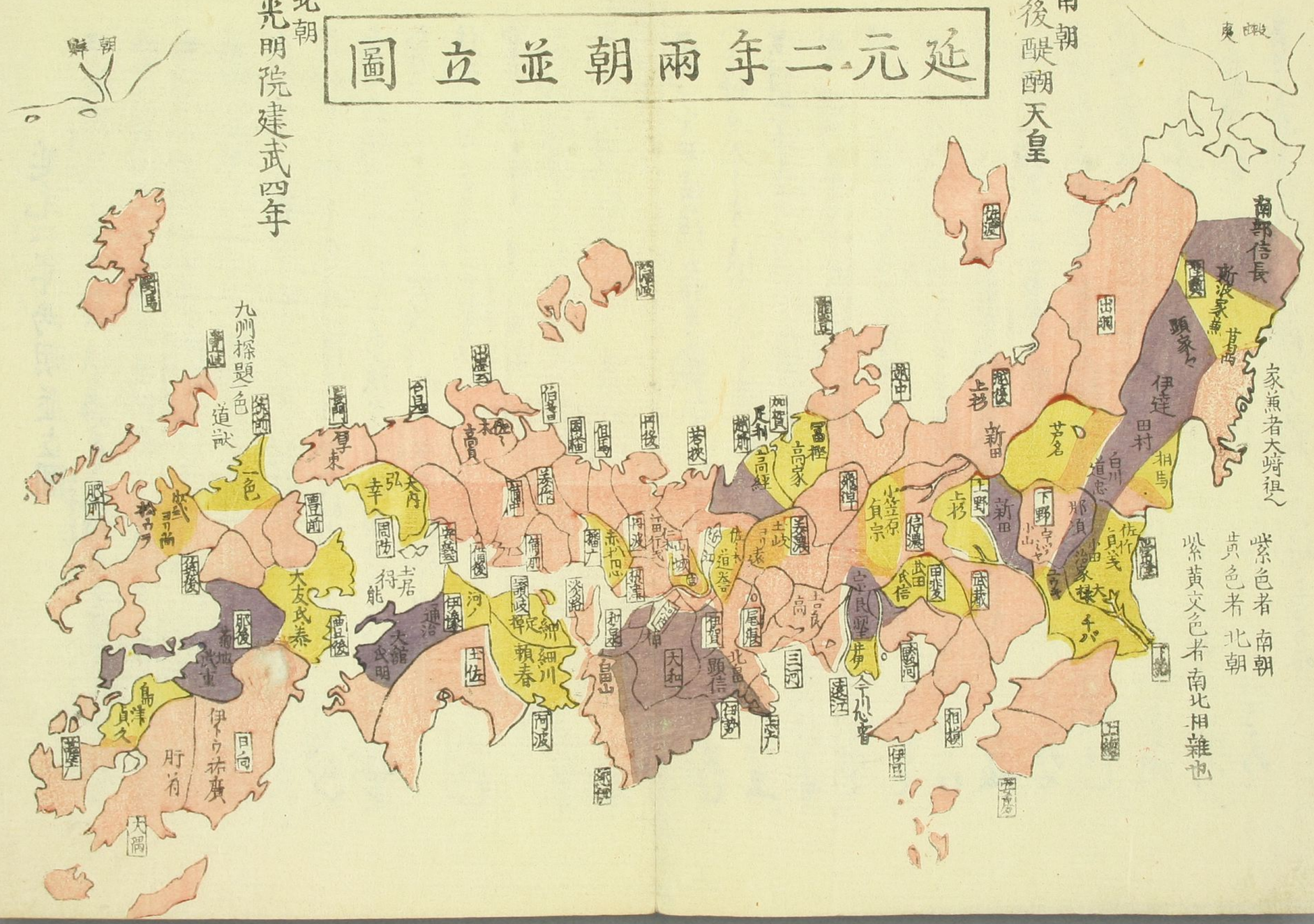
往年保元平治の乱より後平治孫盛り〻相実乃清盛ハ兵〻権を
聚く天下を掌中の動〻作兼三年後白河の法皇を鳥羽殿に執柄基
房を配流〻政務を恣に清盛政これを憤り〻会〻後白河皇を
進く法皇の孫氏令旨を奉〻平家を亡さむと謀り〻遂に西海に討
の大軍向ひ〻宮を殺り政を奪ひ是付法皇の源氏を忌く討る
へき風説有り〻頼朝兵を挙げ義仲ハ信濃に起る法皇の
如く度〻勢ひ脱し盛り〻〻刻南海西海の二乃も皆悉く〇養和
元年閏二月頼朝入乃鎌と〇源行家尾張墨俣川にて平家戦ひ敗を
日行陸奥に奏る秀衡〻勅〻〻報ると対し秀衡命を受て〇真の永元年
城長茂戦後を位〻義仲と戦し利あ〻ず〇日二年平惟盛等
十万の兵を帥ひ義仲と対く加賀の国戦ひ大敗し〻〻義仲捕
来り〻〻来る家〻兵を奉子平内府源〻帝供奉し〻〻

西州を去る後の法方惟義又熱ひ〻れ〻後鳥羽〻源行宮を八幡に奏む
〇義仲京入り〻〻後白川法皇を再び政を簒ひ皇孫を奪ひ皇孫を位に帝
義仲威を奮ふ〻す〇此時平氏を攻撃統第六原田種亜を擒し
源〻山陽乃道を追ひ徐州を後〻〻〻〻ひ〻て捕及を生法を是〻〻〻
服ひ〻れ〻〇元暦元年義仲平陣せ〻所丈法を行家山陵に宮を配を
法〻逢中〻〻〻逆を造れ〻れ〻を〻〻義仲と対し〻む
義仲防戦し西藤を殺を両れ第八を〻〻平氏を播州代八谷の城
を攻す〇文治元年平家果〻〻〻彼を終八幡摂浦の二戦を帝を奉り
宗族悉く亡を是〻〻皇家の大種を敗せり丈後鎌倉補佐を
孫会を幕府を定め諸国を指揮を〇同月年爰京幕府を対を奥州
年〻〇正治元年朱れ薨し長子頼家継く小条時政執権を治世を
〻を乾せ〻れ実朝を立て宮三云を〻〻を〻別当を暁〻を
寿せ〻る〻を後政の皆小孫義時の職の進退となりぬ

延元二年兩朝並立圖

南朝
後醍醐天皇

北朝
光明院建武四年



延元二年兩朝並立圖

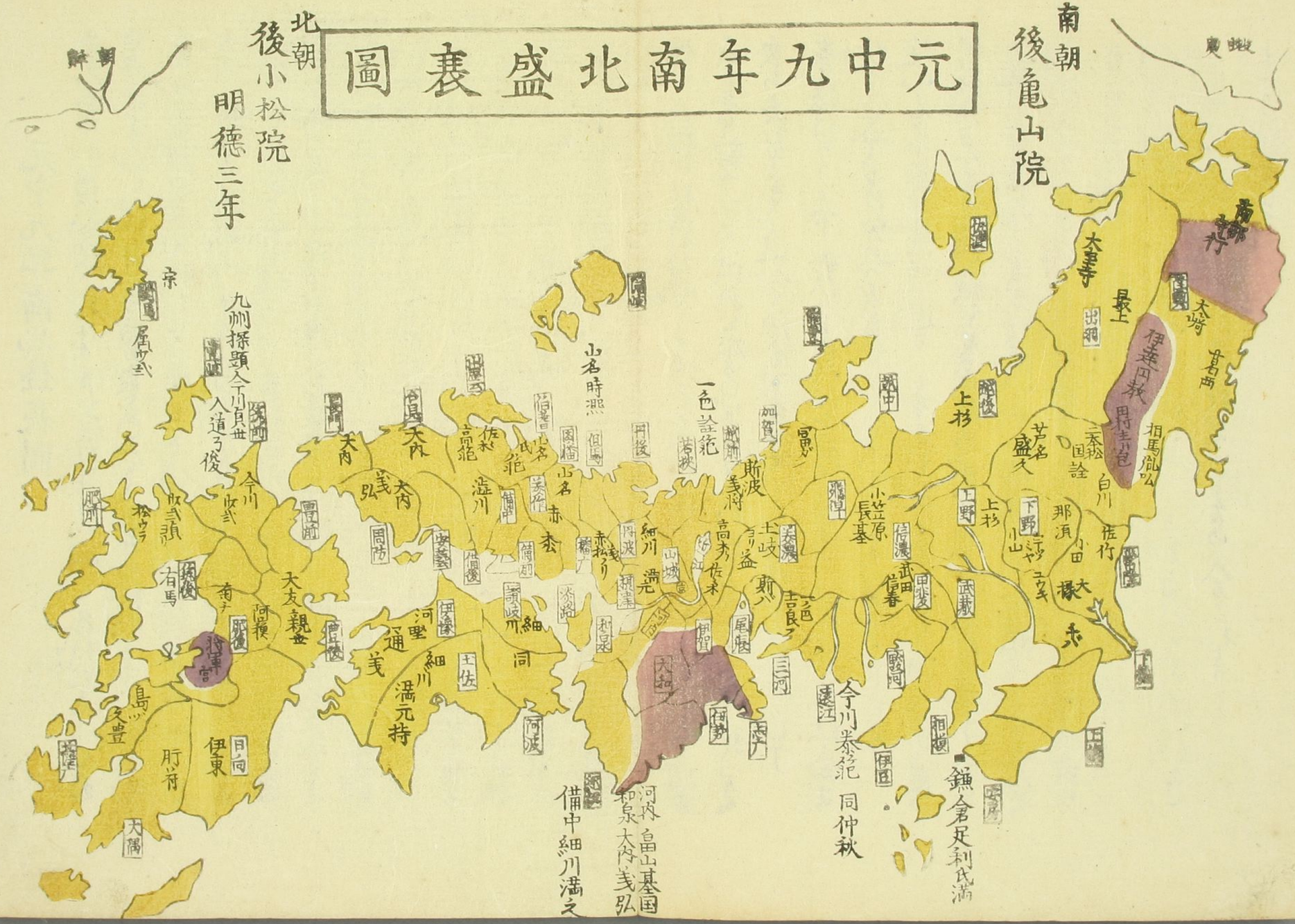
平義時執權となりしより後鳥羽上皇遂に謀叛を企てられ義時の弟時房と子泰時とを遣はし上皇を流し奉り又土御門上皇を土佐に流し奉り又順徳上皇を佐渡に流し奉りしが泰時貞時の政治は在世の内は士民安堵せり後北條氏の政治は在世の内は士民安堵せり後北條氏の専横甚しく遂に革命の起るに至る北條氏の滅亡は武田氏の滅亡と同時なり

帝は後醍醐帝皇子護良親王を以て皇子に遵ぶ帝皇太子を立てられ帝後伏見帝の代となりて北條氏の専横甚しく遂に天皇の出奔を記せり

後醍醐帝皇子護良親王を以て皇子に遵ぶ帝皇太子を立てられ帝後伏見帝の代となりて北條氏の専横甚しく遂に天皇の出奔を記せり

帝は

元中九年南北盛衰圖


北朝
後小松院
明德三年
南朝
後亀山院
朝鮮
宗
屋久
九州探題今川貞世
入道了俊
今川
松浦
肥前
有馬
大友親盛
河獨
筑紫宮
島津
久豊
肝付
伊東
日向
大隅
大内
義弘
大内
義弘
通義
河野
細川滿元持
佐々木高貞
山名氏清
山名時凞
但馬
因幡
伯耆
山名
赤松
細川
河内
備中細川滿之
河内畠山基国
和泉大内義弘
一色詮範
若狭
斯波義將
高木佐木
土岐
斯八
吉良
尾張
三河
今川泰範 同仲秋
上杉
小笠原長基
信濃武田信春
上杉
上野
下野
小山
那須
佐竹
白川
大掾
赤
鎌倉足利氏滿
芦名盛久
三春松国詮
相馬
伊達円教
男時吉
最上
大崎
葛西
大寺
南部
奥州
蝦夷

元中九年南北盛衰圖

延元三年小島郡家々彰国実貞新田義貞脇屋義助の兵勢すゝく陸奥国に北畠三男顕家卿を以て実東の総督とす○延文元年号武蔵国平の義詮の軍の勝とつゞくしかるに族の戦ひ南朝の手ひもとき国家義詮在職ゆゑ補佐す南朝武威父祖に超す北後の為細川頼之能く是を補佐す南朝武威父祖に超す北後の為北武朝の力屈して能の京陣を見南方の邦域日を追ひ盛なりしかるに佞臣小島陸奥佞達南朝あり推戴の忠を存もとのべる或は孤軍ひとり対する是ゆゑ或は跡をくらす勤王とおすべきあらず

今歳応永年号足利氏大内義弘と欲く南北和平の議と奏ゆゑ一旦の安ひとく皇統二流と申て彩るべきとあり彩るべきのひとれば同年十二月帝京師に還幸なり北帝後小松と室位をゆづりくゆひ三種の神器を授ひ太上天皇の号と

奉る凡延元二年より元中九年迄又十六年と経て南北一流に及べり実東に総督奏氏亡て後嗣の氏族つゞく其後佞臣に出るの戦ひ別と書すべきらず略す

元中八年九月終りの弦出て北武光ゲ也

征西将軍懐良親王後村上の皇子の後裔成親王の後裔藤と称ふ

是を八代の宮又は軍の宮を称せり元中の末武弱小弱と

法皇より元中十年と定せり其頃云く

法皇より元中の頃大宮司今肥あり又より元中十年と定せり其頃云く

九州再興事所被憑思食也此時分挙義

兵者豊後日向両国守護職并肥後国八代荘

河尻一跡三舟一跡海東一跡并豊後荘等夏

可被知行由依　征西大将軍宮御執達如件

元中十年二月九日　　実綱

阿蘇大宮司殿　　左中将判

應仁元年東西干戈圖

後土御門院

朝鮮

武田信廣
討平於蝦夷称蛎崎氏

南部通継

秋田 小手 最上 大崎 伊達

相馬 田村 岩城

三本松 二階堂 白川

芦名

上杉房定

畠山政長持

畠山義統

畠山政国

京極持

京極持

九州探題渋川教直

▲奥羽之地各據交混故皆不加彩色也以下准之

▲関東 青色者成氏方 紫黒者上杉方

高足利成氏

▲紫色ハ細川勝元方

▲黄色ハ山名宗全方

▲紫黄間色其間有西家党之

武田国信

山名宗全

山名勝豊

京極持

大内

大内 政清

大内 政弘

山名

武田

山名

赤松

細川

畠山

大和

畠山

細川

細川

細川

應仁元年東西干戈圖

應永元年義滿公の御時に嫡子義持を世子とし給へども
年を経て山名氏の副将軍量の事を世の後義教公義持の三男なり一系譜門跡義教公を偏く
厳しく性質厳刻にして刑罰を事とせり世に怨嗟を発れ記
実説の物語に長谷の執事上杉憲実を陥入れの事を戦して自殺せ
ず一旦上杉を助け給へ共遂に憲実を出されば程なく遁世
別の実説に実説の異説を上杉八幡の宮の宮司の子なり
光清方豊前に○応永元年赤松満祐入道義教公を饗して接待の事
是を故に克ず就て山名持豊と共に謀て満祐を誅す
与力の者共多く切腹す満祐遁世
上杉憲房の残党住せ放持氏の赤子成氏を擁し憲実の子憲忠を殺
殺して後成氏の仇なりとて憲忠を誅せ○長禄元年
将軍義政と御舎弟と上杉と共に成氏を討む義政公渡御ありて風雅を好
の人なり故に奇の衡を平ぶ○今年應仁元年細川勝元山名宗全相撲を
赤松の赤西に各十余万の兵を擁し挑戦ふこれを世に應仁の大乱と云ひ
と称す故荒涼の地となりぬ○赤松政則を陸奥と陸奥
奥州に成す○文明元年将軍義尚世子義尚の後年赤松家再興す○同
年二月宗全病死す勝元も同月逝去す○政元の子義澄を殺せり山名氏
出家す○同九年赤松の軍敗して赤松滅る
○長享元年河州の二郎の二郎の軍敗して赤松滅る軍自滅と伝す○実説には西上杉
実説に三年掛て成氏方と赤松三分す○同二年に成る
中八幡に伴せむとす武蔵国掘兵政親亡ぶ○延徳元年義尚公薨す
政親子の安房守義忠を殺す○同二年政親伊豆の塚城に逝
小藤太氏俊を殺す○明應二年畠山義豊を殺す軍伝代の為の内乱
と称す細川政元宿老たりしに成り義澄を殺中に遁る政元義澄
の賊と云て赤松と対平く○同六年義氏古河に逝一嫡子政氏継ぐ

永正六年両營二川分争圖

後柏原院

當將軍義稙公　大内義興　細川高国　畠山尚順

前將軍義澄公　前管領細川澄元

在江州　在阿州

古河公方　朝臣

九州探題　渋川尹繁

大内親治

畠山尚順

畠山義勝

畠山尚順

一色義直

武田元信

山名致豊

細川成之

畠山尚順

長尾為景

伊達

相馬

南部安信

大崎

葛西

最上

秋田

小田原

佐竹

那須

上杉顕実

上杉朝良

上杉憲房

上杉定実

長尾景虎

長尾景春

長尾景信

長尾景長

長尾景人

長尾景虎

長尾景虎

長尾景虎

永正六年両巻二川分爭圖

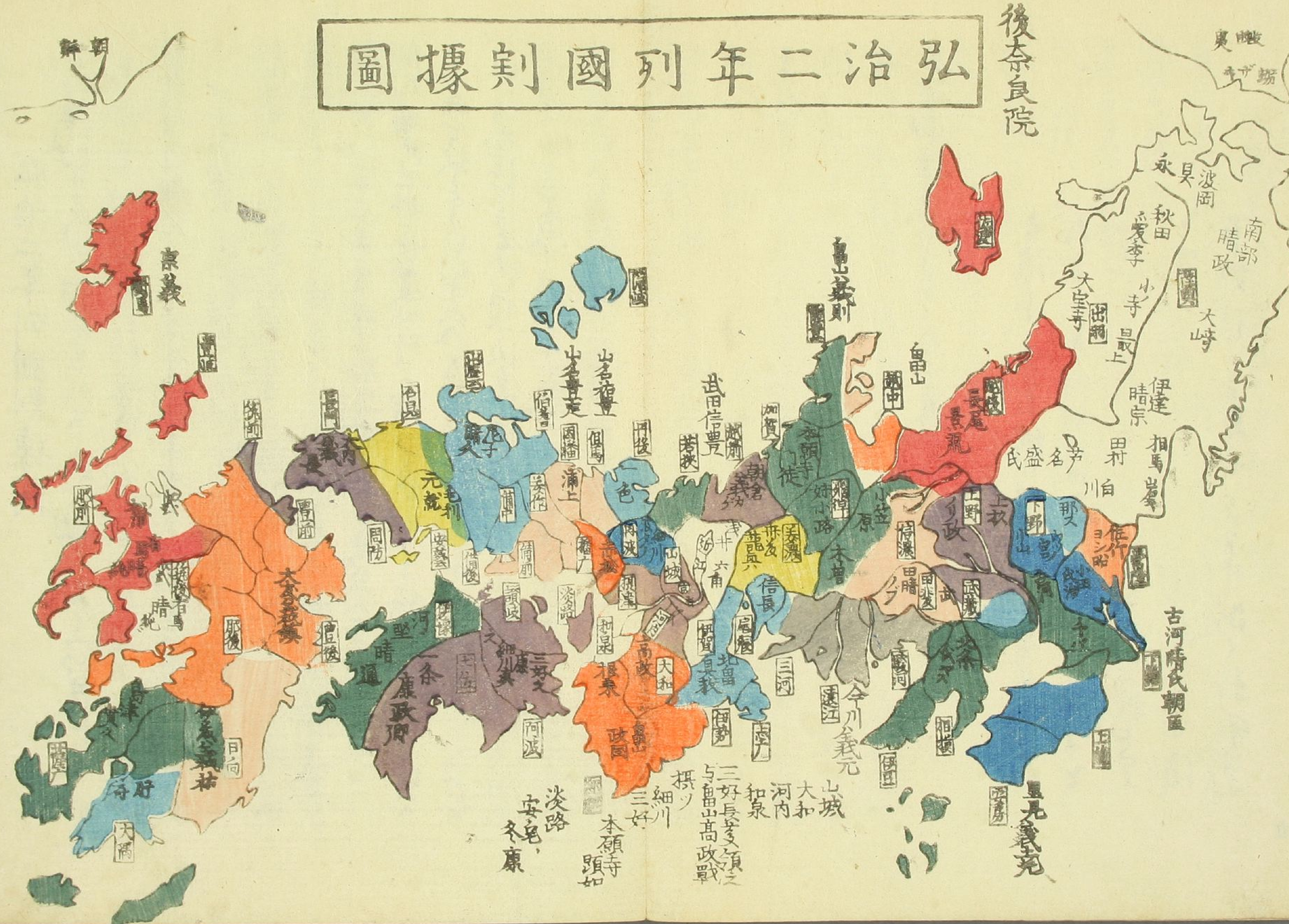
是より先管領細川政元六條政長の二達と主君子と澄元と名つく其後又同氏成元の子澄元と養ひくすと○永正四年政元其小兵の為管せらる香西元長い浅元と主と三好長輝い浅元と主て合戦を香西殺す澄元も自殺を以て丸と称す同所の夫用義與於相国義稙を援ひ大軍を起し上洛を細川高国足利義澄ハ義澄を奉ひ澄元京師を出て奏を義稙を入京なりく再び相軍住〻義與高国共政を掌ごる

今歳永正長尾為景共政を上杉房能と戦ひて戦後とりだす○同七年上杉顕実入乃可凉并戦後於くる弟と合戦して敗死を養子憲房管領を継○同十六年小條早雲入乃卒し長子氏綱嗣く○同十七年三好長輝弟と故く克を共政高子と共に討る○出雲国護尼子経久術家所〻を主と併呑○大永元年義稙高国と和

ある也弟とさう決断と接ること於くる国共相軍義澄の嫡子義晴を向へくる相軍とす○同二年前相軍義稙を伐る兵乱を○三好長奏放浅元の子晴元を出てくる国と合戦をする国人植海及刊ち敗を浦上村宗とさのく浦上宗伐使援の為と使し接ひて出て法しく晴元三好と戦ひ〻が敗績して常植村上氏の乱亡す長奏大内西とよりく共政三年高〻晴元ふいくく和〻しうび

云伝ふ国ハ元来細川家の管領するところ
たるを至年両細川のあらそひくく共くなと
陪臣なるいと多あるさまよう国人弟ひの挑をく
子安藤云幸山留お議して一條房家家と懐
多郎信〻主興せずび国中衆く騒擾す

弘治二年列國割據圖



後奈良院
朝鮮
南部晴政
秋田愛季
大宝寺
伊達晴宗
大崎
最上
相馬
白川
芦名盛氏
古河晴氏朝臣
武田信豊
今川義元
信長
山城
大和
河内
和泉
三好長慶領之
与畠山高政戰
攝ツ
細川
三好
本願寺
顕如
淡路
安宅
冬康

弘治二年列國割據圖

系統隆盛なるを以て多くは記録を失ふ

○天文元年細川晴元三好長慶入道宗三と共に摂津を攻る○同七年小

條氏綱氏康父子下総国古河府を攻る足利義明入道（氏の二男生実の兄弟）

と称す足利義澄の養子（安房上総の守護）やがて合戦なり小條勝利を得て義明討

死を見よう氏綱の威武を恐れて据ひ○同十年武田信虎甲斐中を攻る

康嗣ひ〻つゝもく手出を慮む○同十一年出羽尾張の系統中を攻る

敗死を○同十四年毛晴元の管領と共に三好長慶が

細川晴元三好長慶と戦ひ廉敗〻一緒出の六角義賢が

さすがに後よう○同十六年弁長遠三郎入道宗瑞氏の養子

追〻義澄を攻る○同十九年毛利元就

陶晴賢を厳島に滅ぼす○同廿年

接戦を恐れて○大友義鎮（後に宗麟と号）

氏康と戦ひ甲斐を攻る出羽尾張系乱を傍り後手家綱を攻る今年

（弘治二年）毛利元就厳島に陶晴賢を滅ぼす○陶晴賢は大内義隆の家臣

元就と対峙を保つ戦ひ大内敗して自殺元就嫡子隆元次男

小早川隆景三男吉川元春を以て勇略に富む毛利元就

隆景を連ひ〻国防を以て攻入る大内義長防長の策さへ

自滅す毛利元就の子晴久（毛利の孫）と地を争ひ戦ひ止む○同

三年毛利輝元三好と和睦を結ぶ毛利勇略の程

知れり○元孫元年元就嫡中後を略す○同三年今川義元武威

つゝ後幸三の軍と平ひ〻尾張を攻せむ織田信長防ぎ戦ふ義元

捕獲せられ対死す見よう信長の武名ますます高し

○毛利大友と共に系乱対戦を○上杉系乱大挙して小條を攻る

武田入道三年の末小田原を攻せむ関東の諸侯を率ひ

兵を勢ふ

永祿十一年足利更替圖

正親町院

朝鮮

琉球

薩摩

大隅

日向

肥後

肥前

筑後

筑前

豊後

豊前

長門

石見

出雲

隱岐

因幡

伯耆

但馬

丹後

丹波

若狭

越前

加賀

能登

佐渡

越後

出羽

陸奥

蝦夷

南部信直

秋田

岡部

大崎

伊達

相馬

岩城

佐竹

小田原

上杉輝虎

武田

北条氏康

上野

下野

信濃

甲斐

駿河

伊豆

遠江

三河

尾張

美濃

飛騨

越前

加賀

能登

越中

上杉

長尾

朝倉

武田元明

畠山

畠山

畠山

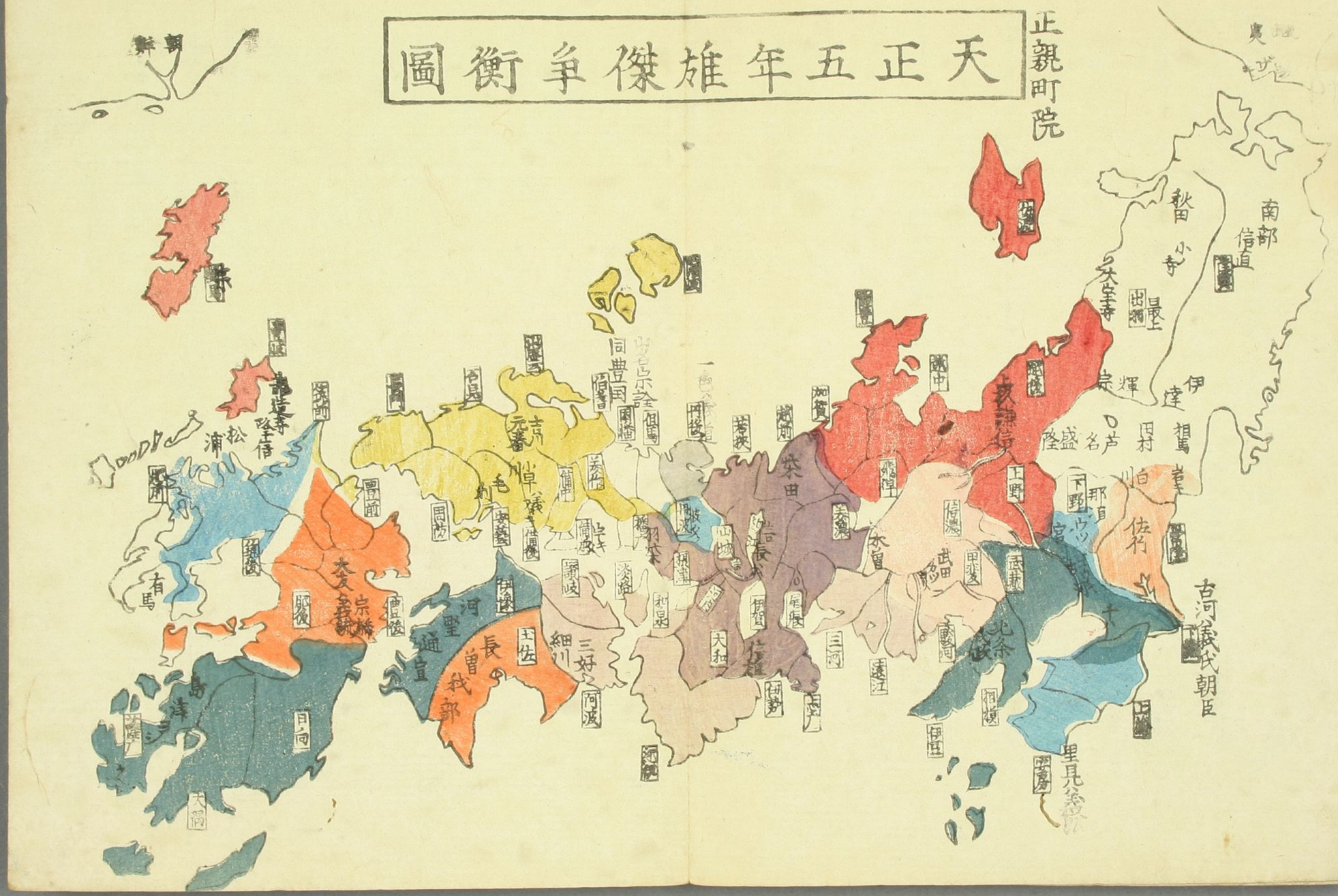
永禄十一年足利更替圖

永禄七年三好長慶逝去し歩兵義つぐ十の一存の勝を家とつく一族
若くは三人衆と号し兵権をとりて将軍義輝を悩ます○同八年
三好が業小なる室町の営を攻撃て自殺を変おこせ
三好が党阿波より義栄をむかへ三人衆と共
将軍位を○松永久秀が義存宝の位権勢ありしを三人衆と水
和かく合戦をおこす河内畠山の政も松永を助勢を○尾張義久
牧島の毛利のことをうつて教年郷つくを強系を○同十年三好
義つぐを一族と殺し松永と合体を
今年永禄十一年の春信長伊勢を伐○同しき秋信長義昭を奉じて
一説に元亀元年と云供奉し六角承禎を攻く河南を端を見て寄く三好
退く河内の城を攻る信長をもむく京入を上をうつて邪を
平らぐ義昭を立洛の後将軍位を信長に同十月を後出し又云と

伊勢を平らく伐邪を略を出る小畠奥数々和談ありく信長の
子息信雄を猶子とし○この年甲斐の武田晴信入道信玄今川
氏真を逐く駿河を取り　冬を及び絶して出をうちたむ○
毛利元就ふたび出を挑を陸奥く大友義鎮と対陣をし屋を
うばひ尼子の高倉山中幸盛尼を捕久と取立て主とし
出雲を就る又使者の宮崎多聞家も使中を侵を
翌年十二年毛利久秀を伯耆の三見を攻を○同年の冬毛利輝元
陣　○元亀元年輝元の孫元就の孫を出雲を出く捕久とうつ○宮
崎多聞家に義作の浦上宗家と戦ひ毛利を強うて援を
ふ○同二年元就逝去ありく輝元を業をつく○同三年輝元
毛利の兄弟を略を捕久を殺して周防を去る○去伐の長宗我
部元親漸く強くして土佐を併せ侵し

天正五年雄傑爭衡圖

正親町院



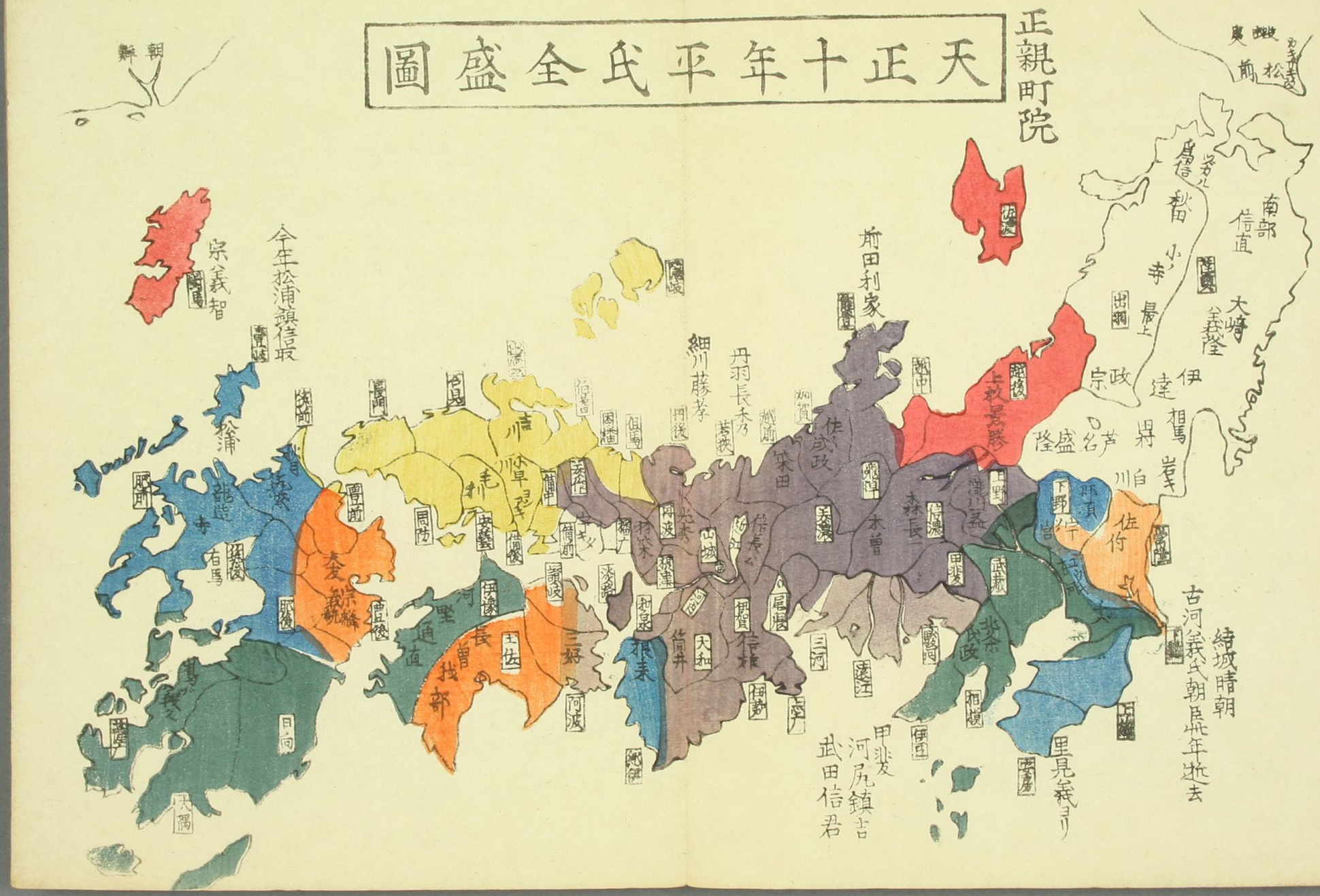
天正五年雄傑爭衡圖

將軍義昭卿は權勢悉く信長に奪はるゝを怒り
憤り天正元年石山の城壘を捨てゝ退走す同四月武田信玄逝
つゝ芸を責破る義昭卿紀州に逃
げゝ丹波とつゞく○信長は北越の
と亡ぶ○吉川元春周防伯耆を攻む西山名毛利と係る○同二年
將軍入道信越中に討入社堂を取る○同三年義昭卿中国
列り毛利と講む輝元より京師へ護送の兵を進む○同
四年信長淡州岐阜より江州安土の城に移る丹後丹波家
命して小國を討らめ羽柴秀吉を播州に山陽を略さしむ
今歳天正元年毒多丸家浦上宗景と合戦す小早川隆景と
助けゝ浦上を破り義作を取る後直家ひそかに羽柴秀吉を
○日向の伊藤義祐敗走薩州の島津義久と戦ひ敗走す

戦ひ敗ゝ出る後去る大友に倚る○同六年三月上杉謙信逝去す
毒殺昌氏（小田原北条氏康の子）謙信（長尾景虎）と争ひ合戦及ぶ武田
勝頼（謙信の外甥）逆謀と自殺
丹後を略さしむ○秀吉播州に於て尼子勝久を上月の城に囲む
隆景元春元就の子と共に信忠（信長の嫡子）を助く
殺害し地利便なるを以て軍を進め勝久を自殺
山中鹿介逃亡して討る○大友義鎮伊東帰入の為薩州を攻
て敗績す○長宗我部元親土佐より九州のうち大友に背くもの多し○毛利
元親土佐波濤を隔て三好存保防戦して利なし○羽柴毛
利と但馬周防を戦ふ○勝頼上州より出て法師を小笠方と法城を陥す
○肥前の龍造寺隆信勇猛にして西筑紫を攻め大友領を侵す
最足の勢ひなり○同七年信長光秀命じて丹波を取しむ
波多野秀治亡ぶ○此年宇喜多直家卒す

天正十年平氏全盛圖

正親町院



天正十年平氏全盛圖

今歳二月信長公武田を伐ち給ふ信忠公は先達て発向なされ春の後の法城を下し〜進んで甲州を攻入る勝頼敗走し天目山に戦死を遂げ三月信長公も既に別荘なり瀧川一益の切を賞し上野一国信州伝久郎ホとあと関東の法界を流領せしむ甲信駿豆既の地も又各〜頒ち授く○武田勝頼森長一と逆と為て上杉と伐ち景勝と伝漢戦中〜合戦と○同四月羽柴秀吉使中〜攻入毛利と對陣して援兵を安土ゟ〜惟任光秀沈田伝輝ホとはかり助しめ又三七帝信孝三男は丹羽長秀ホと共に四国の長曾我部と討しむ伝長公も続て陣のため京師ゟ同六月二日の暁光秀反逆して伝去の旗敵ホ能きと就云ひて これと戦を信忠ゟハ妙光寺ゟ攻ひ出ゟ二條於て戦死しぬ 此変ゟ〜法国大ゟ擾乱を

変ホ羽柴秀吉ハ毛利と使中対陣せしゟ和議して按州ゟ伝孝長秀并ゟ中川清秀高山右近ホ共に惟任と合戦を光秀ホ敗して小栗栖ゟ逃ゟ農兵ゟ為ゟ討ゟ光秀ゟ秀吉の威名を恐ゟ○此総乱を伺ひ長曾我部ハ阿と攻ゟ伊豫を侵す小笠原貞慶ホ長曾我部と通ひ為て伝の本領を取返す○秀吉故伝公ゟの幼息三法師丸伝秀伝と共に副主ゟ丈を擁を執り○同十一年伝孝勝家尾張戦ホ敗ゟ秀吉と伐つ皆克ぶ〜亡ぶ羽柴の猛勢〜強大ゟ秀吉加州前田利家の雄略すれるを以て小州の従属を○同十二年羽柴大峯〜伊勢ホ入法城を下して尾張を向ふ伝雄ゟ力微小〜防ぎ難く援兵を 強敵を清ホ丈孤弱と勝ゟ張ひ〜遂に〜ひ同日に川秀吉尾州ゟ帰して奏ゟ伝と侵し小牧長久手ゟ〜大ゟ敗績と丈援和睦ゟのひろ策おさ決ゟぬ

天正十四年豊臣征遠圖

正親町院

朝鮮

秀吉公以摂州大坂為都城矣

宗義智

松浦鎮

龍造寺政家

大友義統

毛利

小早川隆景

長曾我部

宮部継潤

堀秀政

丹羽長重

細川忠興

前田利家

上杉景勝

蒲生氏郷

伊賀

筒井定次

毛利秀頼

織田信雄

徳川家康

北条氏直

里見義頼

陸奥

相馬盛胤

岩城常隆

田村清顕

白川義親

下野

那須資晴

宇都宮国綱

信濃

小笠原貞慶

木曾義昌

佐竹

伊達政宗

蒲生

南部信直

秋田実季

津軽

大崎

最上

小寺

出羽

亀王丸

名護屋

蝦夷

天正十四年豊臣征遠圖

去ぬる天正十二年龍造寺隆信の旧主肥後の有馬晴純入道
仙巴と攻ゝるよりして薩州より援を乞ひ
此後隆信の兵勢つよく強く且義久の令弟義弘勇猛絶倫
にして向ふ敵なしと雖も大友の一族立花鑑連入道道雪能く兵を
用ゆる有り世在世のうち数軍を後援なるを及ぶ事なし隆信没後は
大友の政務副ぐ鍋島直茂ありて武略を廻し領地を保てり○
今歳既に義弘肥後より筑後を略し宰府を抜き秋月種実も
これを慕ひ大友義統筑前筑後の境の長尾に援軍を京師に送り西海の
諸侯あり山陽南海の軍馬ども上達し数向せしむ十二月島
津勢豊後に乱入し義統豊後に逃く○筑後は義久弱造寺の兵を
後援し肥前の法華院宗義弘と守護せしむ
○翌天正十五年の春関白秀吉西海の大軍の到る所武威やふるを

武威降る迫人ぐ薩州を討入合戦ありて終に降服し
九月九日の年旬を○同十六年肥後半橋のみつを伐て政務を
伏し其領地を加藤清正西行長に授て○同十七年奥州の伊達
政宗会津の芦名義広を逐ひ其地を併せ武威東州をふるふ
常陸の佐竹義重兵馬強く北条氏達と後と年を出羽の最上
義光も又一方の雄と称す○同十八年豊臣関白小田原氏を伐つ氏
政逐に滅亡し奥羽の乱る色悉く平治せり
文禄元年三月より朝鮮征伐の師起りて八道の州県大
半降り其国王朝鮮を捕へ生擒を我国に送る
と討伐せんとせしが朝鮮と援けて防戦と我国長三年付
大軍を帰し朝鮮を援けて防戦と我国長三年付
豊臣太閤薨去ありて兵法の旨敗陣せ

國高改 足利勇士鑑

惣大將 足利左兵衛督尊氏
嫡子 足利左馬佐義詮
舍弟 足利左馬頭直義

御一門衆

尾張十万石 足利尾張守高經
陸奥七万石 足利式部大輔家兼
越後十万石 斯波治部大輔義將
尾張三万石 斯波左京大夫氏經
丹後六万石 仁木左京大夫頼章
伊勢四万石 仁木右京大夫義長
讃岐十万石 細川讃岐守頼春
河内八万石 細川武藏守頼之
河内六万石 細川相模守清氏
伯耆七万石 細川阿波守和氏

諸御大名衆

近江十万石 佐々木判官氏頼
河内九万石 佐々木佐渡入道道誉
佐渡一万石 佐々木左兵衛尉顕綱
近江三十石 佐々木近江守秀綱
下総二万石 千葉介貞胤
河内一万石 千葉新介氏胤
常陸十万石 佐竹上総介貞義
河内五万石 佐竹左馬頭義敦
下野三千石 藥師寺二郎公義
河内八万石 中條備前守秀長
伯耆三千石 波多野上野介宣通
豆後七千石 宇佐美三郎祐氏
伯耆一万石 三浦之介高明

河内守　細川陸奥守顕氏
陸奥国三万石

細川淡路守師氏
河内国一万石

細川卿律師定禪
陸奥国二万石

細川式部大輔繁氏
河内国九万石

畠山右近衛督基國
紀伊国八万石

畠山阿波入道道哲
陸奥国五万石

畠山修理大夫國氏
紀伊国五千石

畠山左近將監清氏
三河国二万石

荒川遠江守頼直
同国七千石

荒川三河守詮頼
同国十万石

吉良左京大夫満義
上総国二万石

吉良修理大夫貞家
三河国二万石

吉良左兵衛佐満貞
上総国五千石

吉良中務大輔満家
駿河国六万石

今川上総介國範
参河国五万石

今川伊豫守貞世
伊豆国五千石

狩野介義次
英ノ国十万石

土岐大膳大夫頼康
出羽国一万石

二階堂出羽守行通
甲斐国五万石

武田甲斐守信武
会津国二万石

武田伊豆守氏信
駿河国十万石

大内周防權介弘世
伝馬三万石

小笠原信濃守貞宗
同国一万石

村田周防守義安
伝馬一万五千石

木曾左馬頭義行
おう摸国六万石

上杉民部大輔憲顕
越後国五万石

上杉彈正少弼朝房
武蔵国十万石

高武蔵守師直
越後国五万石

高越後守師泰
土佐国二万石

高土佐守師秋
駿河国一万石

高駿河守師義
義广国十万石

嶋津左近衛督貞久

今川右近衛門佐仲秋　一万石
今川治部大輔範氏　駿河一万石
山名伊豆守時氏　但馬十万石
山名弾正少弼師氏　因幡三万石
里見民部少輔義宗　下野三千石
一色修理大夫範光　丹後三万石
一色左京大夫詮範　同二万石

諸御大名衆

赤松入道圓心　摂津十万石
赤松信濃守範資　播磨二万石
赤松筑前守貞範　因幡三万石
赤松律師則祐　備前又万石
宇都宮治部大輔公綱　下野又万石
宇都宮下野守氏綱　同二万石
小田常陸介時知　常陸二万石
小田筑後守貞知　同二万五千石
島津陸奥守氏久　大隅又万石
塩冶判官高貞　出雲三万石
澁川刑部大夫義季　大和三万石
澁川中務少輔直頼　同二万石
石堂右馬頭頼房　伊賀二万石
上野左京大夫詮無　同一万石
大館左馬介幸氏　下野一万石
大友修理大夫氏泰　若狭八万石
大友近江守氏時　若狭三万石
毛利備中守師親　安芸一万石
毛利中務少輔廣房　同又千石
完戸安芸守朝重　同三千石
小早川又二郎次平　備後一万石
伊東大和守祐武　同三千石
松浦肥前守昌栄　肥後一万二千石
大宰少貳頼房　筑後三万石

陸奥十万石 伊達弾正大弼宗遠
同三万石 伊達大膳大夫氏宗
対馬守 宗刑部太輔頼氏
同四万五千石 宗讃岐守尚義
一万石 富樫久高
伯耆二万石 桃井若狭守吉晴
下野三千石 赤橋武蔵守久時
上野三万石 岩川尾治部少輔元亮
肥後四千石 山崎右馬久廣平
播磨三千石 小寺播磨守喜継
同二千石 氏家中務重國
上総三万石 有原四郎義季
安房八千石 九鬼兵庫頭景義
摂津二千石 有馬出羽守義祐
同二千石 秋山新蔵人朝政
下総二千石 大森彦七寅正

浪華　敦賀屋彦七
東都　綿屋喜兵衛
　　三河屋甚助板